反・少女

―短編小説集―

星野廉

目次

反・少女
＊ 3

リハーサル
＊ 11

コロニー
＊ 19

反・少女

＊

「ここ、よく来るの？」
　店から出ると、横で男の声がした。真琴は立ち止まった。男が笑みを浮かべて、今真琴が出てきた店を顎で指している。男の顔は平均以下だが、歯並びが妙にきれいだ。年は二十歳前後だろうか。ダークグリーンのコーチジャケットの下に、薄手の淡い草色のフリースジャケットを重ねて着ている。フリースのファスナーは首まで引き上げられている。
　外は寒い。真琴は身震いしそうになるのを堪える。
「何か用ですか？」
　補導員だろうか？　　繁華街を見回っているＰＴＡの役員にしては若い。それともナンパ？
「やっぱり、女の子か」と男が言った。

　紺のダッフルで体の線を隠しているのに、どうして分かったのだろう。髪型も、ついさっき勇気を奮ってアピタの男子トイレに入り、洗面所の鏡で最終チェックしてきたばかりなのに。歩き方で分かったのかな？　　練習が足りなかったのかも――。真琴は思う。
「少し話さないか？ 別にあやしい人間じゃないつもりだけど」
「だから、何か用ですかって聞いているんじゃないですか」
「いやあ、別に用ってわけでもないけど、ただ女の子なのに、ああいうのを買うなんて珍しいと思っただけ」
　そのまま振り切ろうと思ったが、相手の思惑も知りたかった。それにきょうは日曜日だ。時間もある。少し様子を見ようと真琴は下手に出ることにしたが、敬語で通すのもしゃくに思えて、わざと「おじさん」と呼んでみる。
「おじさんも、よく来るの？」
「いや」
　男は少し考えるような顔つきをした後、そのまま立ち去ろうとする気配を見せた。路地だが人通りはある。路上で突っ立っている二人に周囲の視線が集まり始めている。
「ねえ、おじさん、いきなり失礼じゃない？」
　男は眉をしかめた。話し掛けたのを後悔しているようにも見える。真琴の言葉を無視する気なのか、男は視線を下に向けて来た道を戻り始めた。

「ちょっと待ってよ。声を掛けておいて何よ、その態度は？」
　真琴は追いかけた。怖いが、いざとなったら声を上げればいい。周りには人もいるし、品物を店外の道にまで広げている八百屋も近くにある。
「大きな声、出すわよ」と脅すと、男は「しょうがねえなあ」と言い、真琴が出てきたばかりの店の斜向かいにある、雑居ビルを指さした。
「あの中へ入ろう」
　真琴は不安になった。
「嫌だったら断ればいいんだよ」
　男はにやにやしている。
「当たり前じゃん」馬鹿にされていると感じた真琴は、意地になった。「嫌だったら断るよ」
　一瞬、男は鋭い視線を真琴に向けた。真琴の頭の中では、胸ぐらをつかまれて、どこか人けのない所へと引っ張られていく想像の中の少年の姿がちらつく。女だとばれてよかった――。心の奥に、そんな安堵があるのを感じる。

「それ、よく買うの？」
　にやにやした表情に戻った男が言い、真琴が手で押さえているショルダーバッグに目を注ぐ。どうして知ってるのよ、という言葉が出掛かったが抑えた。男の思うままに操られている気がして、無性に悔しい。
「おれと一緒に来るの？ それとも帰るの？」
　男は相変わらず、薄笑いを浮かべたまま言う。
　バッグは兄のもので、普段なら外出時には足を入れることのないスニーカーを履いている。そこまでしてあの店に入ったのに、こんなところで足止めされている自分が間抜けに感じられる。だが、このバッグの中にあるものと関係のある話なら興味がある。
「ちょっとだけなら」
　気になる質問には直接答えず、男が指さした雑居ビルを顎で示した。
「じゃあ、行こう」
　男は平然とした表情でさっさと歩き出した。

　ひょっとして、かなりやばいやつかもしれない、と真琴は思う。だが、ここで逃げるのもしゃくだ。それより、なぜバッグの中身を知っているのだろう。恐怖心より、その疑問のほうが大きかった。
　男の後ろ姿を見て歩きながら、売春をしている同じ学校の女子生徒たちのことが頭に浮かんだ。彼女たちは地元のＳ市だけでなく、静岡にまで出かけて「お仕事」をしているという。真琴は自分がそういう生徒たちの一人になったような気分を味わっていた。
　悪い気持ちはしなかった。むしろ誇りに似ている。それが意外だった。男の背中に「売春」という二文字が書かれているような気がした。あの子たち、こんな気持ちでやっているのかな？ 真琴は早足で進む男の後を追った。

五階建ての雑居ビルの三階に、その部屋はあった。オフィスらしい。応接セットのソファに座るように言われた真琴は、男の行動を見守った。男は、ソファから離れたデスクに置かれたノート型パソコンのモニターを眺めている。真琴のいる位置からはモニターは見えない。

このビル全体は静かだが、隣のビルとの間が狭く、外から女性たちの話し声が聞こえてくる。こちらの窓は曇りガラスで閉まっているのに対し、境を隔てた向こうのビルの部屋は、窓を少し開けているらしい。ときどき、会話の断片がはっきりと聞きとれる。

部屋では、沈黙が続いている。屋内にいる男は思ったより年上に見えた。髪型や格好は若作りをしているが、案外三十くらいは、いっているのかもしれない。部屋のあちこちに目を走らせる振りをしながら、真琴は男を観察した。

「どこに住んでるの？ 市内？」

男が口火を切り、ソファに腰掛けている真琴に視線を投げた。

「いきなり、失礼じゃないですか」

真琴は相手の目をまっすぐ見て言った。

にらまないように無表情を作る。いつも突っ張っているクラスメートの雰囲気を真似る。むすっとするのでもない。相手の存在を無視する。それでいて頭の中で、『ばーか、ばーか……』と何度も言い続け、ほんの少しだけその気持ちが顔に表れるように念じる。

「そりゃそうだ」男はあっさりとした口調で言った。「いきなり、どこに住んでるの、はないよな。話題を変えよう。きみ、高校生？ ごめん、また、お巡りみたいな口をきいてしまった――。やっぱり、女の子は話しにくいなあ」

男は声を出して笑った。

「質問していい？」真琴は単刀直入にいくことにしたが、男は真琴の問いを無視してラップトップへと視線を戻した。「どうして、このバッグの中身のこと知ってんの？」

「おまえなあ、やっぱり、ここから出て行け」と、男は低い声でゆっくりと言った。

「馬鹿にしないでよ。入れって言ったのは、あなたじゃない」

自分でも驚くほどの声を上げていた。隣のビルから聞こえる女性たちの声が、自分の度胸を支えてくれているような気がした。

「おまえが勝手に入ってきたんだぞ」と、男は押し殺した低い声で言った。

男が声を抑えているのは、隣のビルを気にしているらしい。真琴は、脱がずにいるダッフルのポケットから防犯ブザーを取り出し、男の目を見ながら、リングチェーンを引っ張る真似をしてみせた。

「て、てめえ、とんでもねえやつだなあ」

男と真琴は、ほとんど同時に立ち上がった。

「とにかく、邪魔をしないでくれ」

「さっきから、何を見てるの？」

真琴は、デスクに近づいた。慌てた男が、ノート型パソコンを閉じようとしている。真琴は、再び防犯ベルのチェーンを引く動作をした。
「待て――」
男は片手を差し出し真琴の行動を制すような振りをした後、閉じかけたパソコンを開いた。真琴はさらにデスクに近寄った。二人とも立ったまま、モニターの画面に見入る形になった。

真琴のショルダーバッグ内には、ＤＶＤが３枚入っている。さきほど出て来たショップで買ったものだ。その店内の様子が、モニターに映し出されている。インターネットに接続するものだと真琴が思い込んでいた、パソコン脇の小さな器械に、アンテナがついている。どうやら、あの店の防犯カメラとパソコンとを、その器械が無線でつないでいるらしい。だが、どこかが変だった。
モニターを見ていて、真琴は気づいた。画面には、店の奥の一角だけが映し出されている。裸体や、それに近い格好の男性や男性同士が被写体になっている商品専用のコーナーだ。
あの店には、成人向けのビデオやＤＶＤばかりが売られている。防犯カメラの位置は、店内に入ってからちゃんとチェックしておいた。ああいう特殊な商品だけが置いてあるコーナーだけを写しているカメラなど、なかったはずだ――。隠しカメラに違いない。

真琴はしばし言葉を失っていた。男も押し黙っている。真琴は、急に尿意を催した。ここのトイレは借りたくない。部屋から出たい。でも、何と言えばいいのだろう。
「一つ聞いていいかな――」真琴は、無意識のうちにそんな質問を口にしていた。「どうして、女だって分かったの？　わたしが店にいるのを見ている時には分からなかった。だから、声を掛けてきたんでしょ」
「声を聞いて分かった。声だけは、ごまかせないもんだよ」
「じゃあ、いちおう、どっちかなって迷ったわけだ」
「まあ、そういうことだな」と男は言い、笑みを浮かべた。

「帰る」と真琴は言った。
男は、しばらく考えるような表情を見せ、「おまえ、高校生だろ。生徒手帳はないか」と低い声で言った。
「ない。けど、これならある」
尿意を我慢できなくなってきた真琴は、歯科医院の診察券を見せた。男は、医院の名と真琴の氏名をメモした。
外に出た真琴は、トイレのあるデパートの方角に急ぎ足で向かい始めた。そのとき、背後から声がした。
「失礼ですが、お話を聞かせてください」
男が二人立っている。背の高いほうの男が、上着の内ポケットから黒い手帳を差し出

す。もう一方の男はしきりに、真琴の胸あたりを見つめている。

＊

「それで、わたし、いったんトイレに行かせてもらって、それでもって駐車場に連れて行かれて、その刑事さんたちが停めていた車の中で、あのビルにいた男のことをいろいろ聞かれたわけ――」

真琴はそう言って、五杯めのウォッカ・トニックを飲み干した。私もそれに合わせて、ペリエ・レモンを口に含んだ。店内がだいぶ混んできた。カウンター席で並んでいる私たちの背中に、時折ほかの客の肩や腕が当たる。真琴の高校生時代の話はまだ終わっていないようだ。

「もう一杯、飲む？」

「おごってくれるの？」

「飲みすぎじゃなければ」

真琴がアルコールに強いのは承知しているが、礼儀上、そう言っておく。私は真琴が好きだ。男女間の友情を信じる私にとって大切な人の一人だ。顔見知りになって、もう七年近くになる。だが、こんなに長く話しているのは初めてだ。

男装とまではいかないが、真琴の髪は短めで、いつも中性的な服装をしている。きょうは、肩パッドが目立つ、ダークグレイのスーツを着ている。シルエットは明らかにレディースものらしく仕立ててある。胸が豊かなのは隠せない。と言うより、隠す気などないに違いない。そんな人だ。

ドリンクが来た。乾杯をする。

「恐喝していたのよ、あいつ。店の経営者と組んで――」

真琴はそう言って、リップクリームだけを塗っているらしい、小さなホクロのある唇をグラスにつけた。

リハーサル

＊

朋子の家に来ても、長沢時雄は食事をしていくことがない。店屋物をとることさえ嫌う。匂いに対し異常なほど敏感に反応する。それでいて、あのような仕事が務まるのが不可解だった。付き合う相手として時雄が自分を選んだのは、濃い化粧をせず香水の類も用いないからだと朋子は思う。

「何だか、ぼんやりしてるね」と、時雄が言った。

気がつくと、ＣＤプレーヤーの音楽が終わっている。

「ごめん」

朋子はベッドから床に手を下ろしてリモコンを拾い上げ、ＦＭに切り替えた。

「たっちゃんのこと？」

「そう。明日、何を作ってやろうかなって思って」

朋子は正直に答えた。翌日息子の達郎が出張の帰りにこの家に寄っていくことは、時雄に告げてある。

時雄が小さく笑った。

「おかしい？」

「おかしいよ」

朋子は赤面する。

「たっちゃんは、どんなものが好きなの？」

時雄が朋子のほうに向き直った。ベッドのマットが揺れる。時雄と触れ合っていた肩と腕の間に、エアコンの微風がさっと流れ込む。たちまち上体の火照りがさめ、汗が引いていく。

「好きって、何が？」

朋子は天井に目をすえたまま尋ねた。曲げた肘を枕にした時雄が、視線を向けているのが目の端に見える。

「食い物に決まっているじゃない」

時雄が食べ物の話をしていることを、朋子は不思議に思う。これまでに二人の間で、食べ物の話題が出たことが何度あっただろうか。

「あの子の好物ねえ……。小さいころは麺類だったかな。ほら、ケッチャップで味付けしただけのスパゲティーがあるでしょ。あれに目玉焼きを乗せたのが大好きだったの。だから一時は毎日食べさせてた。ひどい母親でしょ？ でもね、そのせいか、たっちゃん、料理がとても上手なの。小学三、四年生くらいからかしら、あの子がひとりで夕飯を作るようになったのは――」

「きっと明日も、たっちゃんが作ってくれるんじゃない？」
「そうはいかないわよ。わたしが作らなきゃ」
「そんなもんかなあ」
「そんなものよ。これでも、一応母親なんだから」
「じゃあ、何か作ってみろよ」
「作るって、今から？」
「そう。おれが実験台になってやる」
　朋子は顔だけを左に向け、傍らにいる時雄の目をのぞき込んだ。やっぱり、いつもと感じが違う。別れる気なのだろうか。不意にそんな考えが浮かぶ。
「いいわ。作りましょう」朋子は上体を起した。「料理の本を買ってあるから、その中から好きなものを選んでみて――」

　かなり微妙な部分を含めて、時雄には達郎について話してある。朋子が十七歳の時に産んだ子であること。今年の誕生日で十九歳になること。三歳までは、朋子の母親が生前、この大きな家で育てていた。中学一年生の時の夏休みを境に、学校以外で化粧をしたり女性の格好をするようになった。中学卒業後に上京して以来、家に帰っていないこと。
　家出をしたわけではない。東京での就職先は決まっていた。上京の前夜に「これまで育ててくれて、ありがとう」と、朋子に向かって頭を下げた。就職した企業はすぐに辞めた。その後もずっと東京で暮らしていて、未成年なのに一時期は女装した男性が接待するバーで働いていたこともあったという。
　現在はその時の気分次第で女性系と男性系の格好をし分けながら輸入雑貨の店に勤務し、女性と同棲しているらしい。「友達じゃなくてパートナーなんだ」と達郎は言う。そうしたことを折に触れて、朋子は時雄に話してきた。

　二カ月前、達郎から朋子に電話があった。
「ねえ、ぼく近いうちにテレビに出るんだ。見てくれる？」
　達郎が唐突に言った。電話は年に五、六回ある。ぼくね、昨日Ｒ会に入ったんだ――。三年ほど前の電話で、達郎がある宗教団体に入ったと打ち明けた時のことを朋子は思い出していた。失恋したといって、泣きながら電話してきたこともあった。精神的に不安定になり、心理カウンセラーと定期的に面談をしていると聞いたこともある。半年くらい前には、ある人と出会い、幸せな毎日を送っているとも言っていた。
　声だけは聞いているが、今どんな顔をしているのかについては、見当もつかない。
　テレビの放送がある日を告げられた。カレンダーで確かめると、祭日の木曜だった。一時間四十五分の特別番組で、人物紹介のドキュメンタリーや、アンケート調査の結果発表、インタビューなどさまざまな企画が盛りこまれ、そのうちの討論のコーナーに出るのだという。
　朋子の勤め先は年中無休で、休みは一定していない。放送時間は午後七時からだ。「残業がなかったら見るわ」と返事をすると、録画をすればいいと言われたので、機械がな

いと答えた。
「ＤＶＤレコーダーくらい買ったら？ そうだ、ぼくがプレゼントする。今週中に送るね。コードの接続とか、自分で出来る？」
「いいよ、そんなの送ってくれなくても。何とか都合をつけて、必ず見るようにするから」
「きっとだよ」

朋子は緊張しながら放送を見た。番組の内容は、朋子には興味も共感も持てないものだった。セクシュアリティという言葉が頻繁に出てきた。八時を過ぎて、スタジオ内での討論会が始まった。
二十人ほどの参加者たちが、なだらかな雛壇状の席に並んでいる。息子の顔はすぐに分かった。約四年ぶりで見るその顔は自分によく似ていた。それを確認しただけで十分だった。
いったんテレビを切った。一分も経たないうちに、もう一度だけ、顔を見てから切ろうと思い、リモコンのボタンを押した。結局、最後まで番組を見てしまった。
数日後、時雄に番組を見たことを話した。
「いろんな人がいるってことだけは分かった。でも、わたしには苦手だなあ、ああいう話題は」
「いい話じゃん」
「何が？」
「母親に自分を理解してもらいたいから、電話して来たんだろ？」
朋子より三歳年下ながら、時雄は時としてもっと年長の男のような口をきく。結婚を前提としない自由な関係で二年以上も付き合っているのは、時雄のそうした老成とも受け取れる性格が働いているからだと朋子は思う。それでいて、子どもじみた言動も多い。その落差に引かれているのかもしれないとも思う。

＊

庖丁を握った朋子の指先が震える。時雄がこんなに長くキッチンにいるのは珍しい。ボトル入りのミネラルウォーターを仰いでいる時雄の喉のあたりから、くぐもった低い音が聞こえる。料理をする姿を時雄から見つめられるのは恥ずかしいが、視線を浴びている自分を意識するのは殊のほか心地よかった。
ただ、この初めての出来事が二人にとって何かの始まりになるとは、とうてい感じられない。逆に、何かが消えかけている。朋子はその直感を信じた。
「ああだめ。包丁がうまく切れてくれない。当たり前よね、出来た物ばかり買ってくる怠け者だもの」
「気をつけなよ。しゃべっていると指を切るよ」
「大丈夫。外科の先生がそばについていてくれるじゃない」
沈黙があった。時雄の機嫌を損ねたらしい。
どうせ、終わりだもの、怒らせたって構わない――。先回りして結果を考えることで、

後で味わう悲しさをやわらげようといている自分に気づく。こんなことが前の人の時にもあった。そう思うと、なぜか笑い出したくなった。
「大丈夫。後はピーラーを使うから」と、朋子は言い直した。「でも、不思議よね。あなたのために料理を作っているなんて」
「だから言っただろう、おれのためじゃないって。明日のリハーサルだよ」

＊

　ロールキャベツとポテトサラダが、テーブルに並んでいる。朋子は、ポテトサラダを口に運ぶ相手の顔を見守る。咀嚼そしゃくする口元に笑みが浮かんだ。
「どう？」
「うん、おいしい」
「本当に？」
「本当だよ。お世辞は言わない――。練習でもしたの？」
「まさか。能ある鷹は何とかって言うじゃない。今度はこっちを食べてみて」と言って、朋子はロールキャベツを指さした。昨日と同じメニューを前にして食欲は湧かない。ご飯だけを口に入れる。「ああ、おいしい。お米って、量が多いほどふっくらとおいしく炊けるんだね。びっくりしちゃった」
「変なの。そんなことに感心しちゃって」と達郎は言い、一瞬考えるような表情を見せた。「お母さん、ちっともおかずを食べないじゃない」
「なんだか、胸がいっぱい。わたし、お茶漬けだけにしておこうかな」と言い、朋子は息子の頭越しに奥の部屋の窓に目をやった。

　半開きのカーテンの端から見える庭はもう暗い。さきほどの夕立を浴びた草木が、家からこぼれる明かりを受けて、所々が光を放っている。
「あなた何をつけているの。さっきから、聞こうと思っていたんだけど」
　顎をあげて朋子はくんくんと小刻みに息を吸い込んでみせた。
「匂う？ これでも、いつもよりは弱めにつけているんだ」
　達郎は伏せ目がちに言った。髪こそかなり長いが、きょうの達郎は特に女性らしい服装はしていない。ゆったりとしたシルエットのグレイのスーツが細い体に似合っている。昼食を兼ねた商談は、うまくまとまったらしい。
　朋子は化粧気がない息子の肌の若さにあらためて驚いた。嫉妬に似た感情を覚える。
「いい匂い」
「これをつけるようになって運が向いたから、ずっと使ってんだ」
「小さいころから、あなたって縁起をかつぐところがあったもんね」
「お母さんは、縁起よりも勘を信じる人」
　いいえ、やっぱり、あなたはわたしの性格を受け継いでいる、ちゃんとね――。朋子は、心の中で言う。この子は感づいている。わたしもこの子の幸せと、その幸せから来るわたしへの心遣いを感じ取っている。いつもの電話での会話なら、「あの人、元気？」

とか、「うまくいってる？」と必ず口にする時雄の話題に、きょうは全然触れてこない。
「気に入ったんだったら、あげようか」と、達郎は香水をつけているらしい襟のあたりを手のひらで煽ってみせた。送られてくるかすかな空気に溶け込んだ香りを吸い込む。その中に、幼かったころの息子の甘い体臭が混じっているような気がした。
「うん、ちょうだい」

家には三時間いただけで、達郎は帰った。帰り際に、達郎はバッグから濃いブルーの小瓶を取り出し、朋子に手渡した。
「お母さん――」
「何？」
「幸せになってね」
「わたしは、このままで十分幸せよ」と、朋子は答えた。息子が言う「幸せ」とは意味をずらせて言ったつもりだった。そのことは、息子も分かっているはずだ。
「なら、いいけど」
そういう達郎の声は、沈んで聞こえた。
「そんなに、わたしって、不幸そう？」と精一杯明るい声を作って朋子は言った。
「ううん」
達郎の首の振り方は幼いころと変わらない。首を少し斜めに構えて大きく二回振る。一瞬、昔に返ったような気がした。頬が火照る。
「泊まっていけばいいのに」と、再度朋子は勧めた。「部屋だって、そのままにしてあったでしょ」
「そうしたいけど、あの人が待ってるから」
玄関で、達郎を送り出すさいに、一緒に暮らしているパートナーだという相手の名前を聞いていないのに気づいた。あえて尋ねようとはしなかった。達郎も進んでその人の名や今の暮らしには触れなかった。こっちに気兼ねして、パートナーの話題を避けている――。朋子は思う。
外資系の企業に勤務している、ごく普通の女性。セクシュアリティには全くこだわらない人。相手のセクシュアリティには関係なく、自分が好きになった人が好きな人という点で、ぼくたち意見が一致しているんだ――。以前電話越しに、達郎はそうした言葉で、その女性と自分の生き方を語っていた。
「あの人によろしく」朋子は言った。
「うん。伝えておく」
そう言いながら、朋子は息子の口から時雄を指す「あの人」という言葉が一度も出なかったことに、優しさと寂しさを感じた。あの人は、もうこの家に来ない――。でも、わたしにはこの子がいる。そう思うと寂しさが消えた。
一人玄関にたたずんでいる朋子は、達郎からもらった小瓶を頬に押しつけた。堅く閉めてある蓋の境目からかすかに匂いが漏れる。
ようやく玄関先から奥に戻る気持ちになった。一つひとつ明かりを消しながら、朋子は寝室へと向かった。ベッドの脇には、五日前に慌てて買った料理の本がある。
明日は何を作ろう？

心もち早足になるのを感じた。

コロニー

＊

「行ってきまーす」
　しょうちゃんは、いつも元気がいい。
「行ってらっしゃい」
　わたしは、そのつど声を掛ける。
「行ってきました」
「お帰りなさい」
　これが何度も繰り返される。別に、苦にはならない。元気がいいにも、いくつか種類がある。

　エネルギーのかたまりみたいな人がいる。わたしが苦手なタイプだ。他人を押しのけるからだ。要するに強引なのである。一方で、なぜかよく分からないが疲れを知らなくて、いつもにこにこしている人がいる。エネルギーを発散するというのではない。むしろ、無気力と無縁だという印象を与える。しょうちゃんは、後者にあたる。しょうちゃんが淡々と仕事をこなすさまを見ていると勇気付けられる。
　しょうちゃんと組んで仕事をするのが好きだ。わたしは運転手役だ。車は新型のムーヴ。旧型に比べて車内が広いので、物を運ぶのに適している。わたしは、もともと狭い空間が苦手だった。でも、いまはほぼ大丈夫だ。それよりも大きな問題をかかえているからだ。
　しょうちゃんの役目は、車に積まれたお弁当と連絡メモを配ることだ。お弁当とメモは週に二回、午前中に運ぶ。区域が決まっていて、それほど広くはない。拠点病院を取り巻くようにして住んでいる人たちの住まいに届ける。午前九時半から十一時半の二時間の作業だ。
　お弁当の届け先はだいたいがアパートで、通りから入った路地に面している。道路によっては、車が入れない込み入った場所もある。そんな所では、走って路地へと入っていくしょうちゃんを見送り、車の中で待つ代わりに外に出て気を休める。

「しょうちゃん、車、好き？」
「ぶっぶー、大好き。でも、運転できない。しょうちゃん、頭、悪いから」
「わたしは、車、嫌いだよ。狭いから、怖いんだ」
「ふーん。でも、運転できる」

「うん」
「すごい」
「そうかな」
「すごいよ、ぶっぶー」
「ありがとう」
　何度か、こんな会話をしたことがある。しょうちゃんを見ていると、車が本当に好きなのがわかる。車の中から、車窓越しにほかの車の動きを目で追う。動くものが好きなのか。なのに運転ができないし、許されない。皮肉なものだと思う。
　物を配達するという作業は路上駐車を余儀なくされるため、車を降りて放置しておくわけにはいかない。たいていは、しょうちゃんがお弁当とメモを届け、代わりに空のお弁当の容器と前回のメモを手にして戻ってくるのを運転席で待つ。
　狭い空間で待つのが、わたしには今でも少しだけつらい。でも、しょうちゃんが元気で仕事をしていると思うと、そのつらさも薄れる。たまに、しょうちゃんと一緒に車まで足を運んでくる人もいる。わたしは男性が苦手なので、緊張する。
「いつも、すみませんね」
「いえ」
　だいたいこんなやりとりで終わる。お弁当の届け先である相手のほとんどが、女性に興味がないという。だから、わたしはこの仕事を引き受けた。それでも、男性と向かい合うと心の奥で大きな抵抗を覚える。いまのわたしの敵は、その抵抗感だ。
「これ作ったんですけど、よかったら、みなさんでお召し上がりください」
　お弁当の届け先の男性で以前はパティシエだった人がいて、クッキーを差し入れてくれることがある。国からの給付金だけで家計のやりくりをしていて生活が苦しいのに、そうしたお金のかかる気遣いをしてもらうと恐縮する。でも、素直に受け取り感謝することにしている。

　お弁当を配達する区域は、拠点病院を中心に広がっているため、病院を遠回りに一周する形で作業が行われる。わたしにこの仕事を任せてくれているのはＮＰＯで、福祉関連のさまざまな業務を展開している。
　わたしが知る限りでも利益は薄い。そもそも利益を追求する団体ではないから当然なのだが、時には理不尽に思うこともある。毎日長時間にわたり私生活を犠牲にして、この団体で働いている人たちがいる。そうした事実を意識し、心を動かされるようになったのは、つい最近のことだ。
　それまでは、自分のことで手一杯で、他人のために自分が何かをする、あるいは何かができるという発想そのものがなかった。

「菊地さん、車の運転ができるよね。もし良ければ、週二回の午前中だけ、手を貸してくれないかな」

ＮＰＯの一員である心理カウンセラーから、そう言われたのは、三か月ほど前だった。わたしは自分と同じような悩みをかかえている人たちと一緒に、一種のカウンセリングを受けている。

悩みというのは、男性に対する嫌悪感と恐怖感だ。原因はいろいろだが、わたしの参加しているグループの場合には、全員が男性による性的な虐待の犠牲者だ。そのグループを指導している人から、ボランティアの仕事についての意向を打診された。

わたしは無職の状態を一年以上続けている。そのわたしに、たとえボランティアと言っても、責任を伴う仕事が与えられるのだ。わたしは迷い、悩んだ。いったん引き受けたからには、簡単にやめるわけにはいかない。週二回の短時間の業務だが、自分にできるだろうか。

ボトルネックは二つあった。一つは、男性に混じり、男性に対して行う作業に耐えられるか。二つ目は、数年ぶりでする車の運転を事故を起こさずに行うことができるか。この二点が気にかかった。現在、気分は落ち着くものの副作用として眠気の出る薬を飲んでいる。

「一度、どんなふうにやっているのか、見学させてもらえますか」

そう申し出たのは、声を掛けられてから十日くらい経ってからだった。

わたしはもともと狭い場所に閉じ込められるのが好きではなかった。はっきり言うと怖かったのだ。狭い所というのは語弊があって、他人から見て広いと思われる空間でも「閉じ込められている」という気がすれば恐怖の対象になる。

たとえば、学校の体育館でも集会や式などで人がたくさんいると息が詰まり、呼吸が荒くなり、全身が汗ばみ、震え出したり、大声を上げてその場から逃れたくなる。そうした心理的な苦痛と身体的な症状の両方に耐えようと必死で我慢しているうちに、気が遠くなって倒れる。そうした経験を、物心がついたころから繰り返していた。

さらに言うと、空間という言葉にも語弊がある。物理的な空間とは限らないという意味だ。わたしにとっては、学校、職場、家族、友人関係といった集団や人間関係までが、自分が「閉じ込められている」とか「息が詰まる」感情の対象になる。これはいまでも、完全に克服できたとは言えない。

ただ、こうした感情には波がある。「嫌だな」「うっとうしいなあ」くらいの気持ちで片づく場合もあれば、さきに述べたように心身ともに疲労して苦しみや痛みにまで高じる場合もある。このような心の動きは、言葉にするのが難しい。人に理解してもらうことは、もうほとんどあきらめかけている。

病院にある複数の科で、複数の診断名を与えられたが、わたしにとっては、そんな名前はどうでもいい。言葉で名付けてもらっても、事態は全然改善しない。中にはそうではない人もいる。

「わたし、双極性障害だって診断されたの。やっぱりねって感じ。インターネットなんかで検索していろいろ対策を練っているところ」

同じような悩みを持つ人たちと交流する会に出席すると、そういう意見を述べる人が少なからずいる。診断名を与えられることで、以前よりも元気になっている。不思議だと思う。戦う目標が定まるから、勇気付けられるのかもしれない。わたしは違う。わたしの敵は診断名ではない。

わたしが現在悩んでいるのは、そうした狭い所が苦手という問題ではない。それより大きな問題は、男性に対する嫌悪感と恐怖心だ。ある男から性的な虐待を受けた。それが心の傷になっている。そう医師は言う。分かっている、そんなことは。分かっていることを他人に確認されると、それがマイナスの駄目押しになる場合もある。

「どうでしたか、できそうですか」

仕事の見学をした後に、カウンセラーから尋ねられた。

「はい。やってみます。でも、続くかどうかは、はっきり言って自分でも分かりません」

「それでいいんですよ。無理をしてはいけません。続けられそうもないと感じたら、その時点で、すぐにわたしに言ってください。そして、話を聞かせてください。迷惑を掛けるとか、そう言ったご心配は一切無用です。決して我慢はしないように」

初めてしょうちゃんと会った時の衝撃を忘れることができない。一見すると、ただのおじさん。ひげが濃く、頭の毛は薄く、半袖から出ている腕が毛むくじゃら。ところが、口を開くと子どもみたいな喋り方をし、行動も外見とは全く異なり幼稚な印象を受ける。

前もって話を聞かされていたものの、実際に会って話をしたり、その作業を見ていて、外見と人格の落差に大きな戸惑いを覚えた。わたしは、考え込んでしまった。悪い意味で悩んでしまったわけではない。こういう人がいるという事実に感動したのだ。

子どもみたいなおじさん。子どもを装っているのではない。そういう人格というか個性が存在するのだ。違和感はある。わたしの場合には、この人にも男性としての性欲があるのだろうか、などと考えてしまう。

そうした思いは消すことができない。でも、しょうちゃんを見ていて、その違和感を超える親しみを直感した。

「やまがみさん、部屋から出てこない」

わたしがお弁当配達の仕事を始めて間もない時期に、しょうちゃんがお弁当を持ったまま車に戻って来たことがあった。

山上さんの携帯電話に掛けてみると、熱があって起き上がれないという。ちなみに、お弁当を配達しているＮＰＯでは、携帯電話の貸し出しも行っている。その場でただちに事務所に電話した。その甲斐があって、インフルエンザにかかった山上さんが一命をとりとめた。そんなこともあった。

わたしたちがお弁当を届けている人たちは、個人差はあるが、健常者に比較して免疫機能が著しく低下しているために、感染症が命取りになる場合がある。お弁当配達には、

その人たちの様子を見守るという大切な目的が含まれている。
　お弁当と共に届けられる連絡メモには、健康状態をチェックする項目があり、その横が空欄で、そこにいろいろなことを自由に書き込めるようになっている。前回届けたお弁当の入っていたプラスチックの空の容器とその日の朝までの状態を記したメモを持って、しょうちゃんが車に戻ってくる。わたしは必ず目を通すように指示されているチェック項目と、空欄に書かれた文字にちらりと目をやって、次の届け先に向かう。
　空欄には絵や漫画を描く人もいる。中には、どきりとするような卑猥な絵もある。誰に向けて、どういうつもりで描いているのだろう。そういうものを目にすると、わたしの気は滅入る。相手に男性とか、性的なものを感じてしまう。一方、いつも何も書かない人がいる。そういう人に興味と好意を抱く。
　お弁当の届け先は、現在十五カ所。お弁当の数は二十八箱。同じアパートに別々に部屋を借りて住んでいる人たちがいる。二人で住んでいる人たちや三人で共同生活をしている人たちもいる。

　現在も、車の運転は依然として苦手だ。びくびく運転という感じ。事務所のほかの人に比べれば、しょうちゃんと口を利くことも少ない。ときおり、車までしょうちゃんを送ってくる男性たちと親しい会話ができない。でも、わたしのことについては、事務所から聞いているらしく、不愉快な思いをした経験はない。
「行ってきまーす」
「行ってらっしゃい」
「行ってきました」
「お帰りなさい」
　お弁当の届け先に着くたびに、こんな会話が繰り返される。仕事のパートナーのしょうちゃんとは、それくらいの言葉のやり取りしかできないけれど、わたしは週二回の仕事の時間が来るのを楽しみにしている。

＊

　お弁当の配達先の人たちと、公民館で一緒になった。拠点病院を囲むようにして住んでいる人たちだ。わたしの関係しているＮＰＯでは、公民館や福祉センターの小会議室などを借りて、同じような悩みや問題をかかえている人たちを集め、交流や一種の集団カウンセリングをしている。
　わたしは、男性から性的虐待を受けたことが心の傷になり、その傷がまだ癒えていない人たちのミーティングに参加している。グループでするセラピーというような大げさなものではない。雑談をしたり、何かテーマを決めて話し合ったりする。それだけだが、同じような体験をした人たちとひと時を過ごすことで、ずいぶん気持ちが休まり勇気付けられる。会は月に一、二回行われる。

わたしがお弁当の宅配をしている相手の人たちと、たまたま集会が同じ日になった。公民館のロビーで携帯電話を使っていると、目の前を通り過ぎていく二人連れの男性たちが手を振った。男性の知り合いが極端に少ないわたしは、一瞬その人たちが誰なのか分からず、気が動転してしまった。

「どうしたの？ 急に息が荒くなったけど、そっちで何かあったの？」
電話越しに篠沢理恵が尋ねた。理恵は、わたしのルームメイトだ。わたしについてのいろいろな事情を知っていて、ある程度理解してもくれている唯一の人と言っていい。
「お、男の人たちにいきなり挨拶されたから、びっくりしただけ」
「誰、男の人って？」
心配そうな口調で聞いてくる。わたしが説明すると、ようやく理恵は安心した。
「――でね、わたし、今夜は帰らないから、戸締りとかよろしく」
通話の最後に理恵はそう言った。その言葉には、文字通りの意味以外のメッセージも含まれている。わたしが今夜遅くなっても駅まで迎えに行けない、という意味だ。
わたしたち二人の間には、どちらかが夜の九時以降に帰宅する場合には最寄りの駅に迎えに行く、という暗黙の了解がある。集会のある日は、わたしはたいてい九時半ころに駅に着く電車を利用している。
その日の集会は途中で抜けることにした。ミーティングは六時半に開始で八時半に終わる。八時を少し過ぎたころに退席すれば、いつも使っている駅に九時前に着く電車に間に合いそうだ。
そんなことを考えながら、ミーティングの行われる部屋に向かっていると、わたしの参加する会の司会役を務めている心理カウンセラーの尾崎さんに声を掛けられた。尾崎さんは男性だ。
「さっき、田中君たちに会ったんだって？」
「ええ、いきなり挨拶されてんで、びっくりしました」
「田中君たちも、びっくりしてたよ。お化けにでも出くわしたような顔をされたって。まあ、あの人たちには、あなたの事情については説明済みだから、問題はないんだけどね」
「田中さんたちには、尾崎さんのほうから謝っておいてくださいませんか」
「分かりました。それと関係のあることなんだけど、きょう田中君たちのミーティングを傍聴というか見学してみませんか？」
突然の提案に、わたしは言葉が詰まった。
「自分とは違った問題をかかえている人たちのミーティングに顔を出して、ただひたすら聞いてみる。そういう経験が、自分の問題を相対化するのに役立つ場合もあります。さっき、田中君たちから、あなたに会ったという話を聞いたんで、どうかなあと思ったのですが……」
わたしは迷った。興味が湧いた。
「まるっきり知らない人たちでもないし、あなたにとっての問題と全然関係ないわけでもないから――」尾崎さんは続けて言い、手にしていたカバンの中を覗きこんで何やら探すような仕草をした。

わたしに考える時間を与えているようにも取れる。わたしは、無意識のうちに、次に尾崎さんの口にする言葉を予測していた。『悩ませちゃったかな。ごめんね。今の話は無かったことにしましょう』と、言うような気がした。それに対して、『すみません。せっかくお心遣いをしていただいたのに』と、わたしが謝る。
「じゃあ、少しだけ覗かせてもらっていいですか」
尾崎さんとのやり取りを勝手に頭の中で作り上げておきながら、わたしは全く別の選択をしていた。

＊

「きょうは、オブザーバーとして菊地さんをお招きしています。菊地さんをご存じない方もいらっしゃると思いますので、ご紹介いたします。希望者の方々のお宅に弁当を届けてくださっているボランティアの方です」
わたしは何も言わず、頭を下げた。
その日のミーティングでは、特にテーマを設けず、メンバー各人の近況報告と雑談を兼ねたお喋りが行われた。最初から席に着いていた参加者は十五名だったが、遅れて来る人たちがいて徐々に増えていった。
薬の飲み忘れの防止法。就職活動の難しさ。食品や衣料の安い店についての情報交換。医師や看護師の悪口。共通の知り合いにまつわる噂話。体力を維持するための工夫。話は、さまざまな方向へと飛んだ。
わたしが参加しているグループでも、同じような雑談形式のミーティングが行われることがある。主催しているのは、同じＮＰＯだ。わたしたちの集会では、参加者各自が飲み物やお菓子を持参する。
ここでは、二リットルのペットボトルに入ったウーロン茶とスポーツドリンクと緑茶がテーブルに置かれ、飲みたい人が飲みたい時に、席を立って自分で紙コップに注いで席に戻っていく。また、ペットボトルの横には、さまざまな種類のパンが積み上げてあった。一個一個が透明のプラスチックの袋に包装され、参加者の数を優に上回るほどある。差し入れだろう。
参加者たちは、発言者の邪魔にならないように節度を守りながら、自由気ままに会議室内を移動している。もちろんお酒は出ていないが、パーティーか宴会という趣がある。わたしは本来参加するはずだったミーティング用に持参していた、ミルクティーの缶を開けて喉を潤していた。

閉じた空間である部屋。そして、その部屋にいるのは男性ばかり。わたしにとっては、パニックを引き起こしやすい条件がそろっていたが、心配していた圧迫感や恐怖心は覚えなかった。それよりも、参加者たちの話の内容に興味を引かれた。
「地球温暖化に関するシンポジウムに、おれたちも参加してみようって話があるんだけど――」

「いまの話、分からないことはないよ。でも、ぼくなんか子どもがいないから、地球温暖化なんて言われても、正直言ってこれから先のことなんて、かんけーねーって感じなんだよな――」
「ねえ、今月から始まったテレビの『かぼちゃ畑の男子たち』に出ているコウタロウ役って、なかなか、いけるよね――」
「いけるいける。わたし、カンさまのファンからリョウさまに乗り換えるつもり――」
「先週、病院の待合室で、『みんな、普通だったら女の人に持てそうな人ばっかりなのにね』って、女の看護師が言ってたけど、あれってセクハラ発言じゃないの？『普通だったら』って、言い方は失礼じゃない？ おれ、マジで傷ついた――」
「待合室って言えば、一昨日、また初対面の患者同士で、大喧嘩があったんだ。おまえがうつしたの、いや、おまえこそがおれにうつしたんだのってやつ。予約のシステム、変えたほうがいいんじゃないの――」
「わたしたちのコロニーと、西部地区にあるコロニーとで遠足をしようという計画を立てているんだけど――」
「そのコロニーって言葉、やめてくれないかな？ 医学用語としてネガティブな意味があるし、教祖が収監されている拘置所の周りに住んでいる信者たちの集団を、テレビに出てくる評論家がその言葉で呼んでいたぞ――」

ミーティングが始まって一時間ほど経ったところで、「みなさん、お邪魔しました。わたしは、この辺で失礼します」とだけ言って、会議室を出た。疲れを覚え、いつも参加しているグループの集会に出るのはやめた。
ロビーを出た時刻は、七時四十分だった。いつもなら、ミーティングへの参加者と一緒に向かう駅への道を、一人で歩いた。男の人とすれ違ったり、背後に人が近付いてくる気配を感じると強い緊張と不安感に襲われる。そういう自分をどう扱ったらいいのかは、まだ分からない。
でも、きょうはいい体験をした。女性には性的な興味を持たないとはいえ、二十人ほどの男性たちと一時間も同じ部屋にいることができた。自分が考えたこともないさまざまな意見を、肉声で聞くことができた。

歩きながら、自分の精神状態について考えた。
いまは、大丈夫な自分と大丈夫ではない自分の二人がいて、大丈夫な自分が大丈夫ではない自分を持て余している感じがする。以前は、大丈夫ではない自分しかいなかった。
わたしには、自分を性的に虐待した例の男を責める気持ちはない。わたしは、結局、あの男を告訴しなかった。自分にも落ち度があったと考えたうえでの判断だった。恥をさらしたくないからとか、裁判という公の場で、あの日に起きたことを再現するのが嫌だったからではない。
結果として、わたしは頭と体とがばらばらになってしまった。頭では大丈夫なつもりなのに、体が大丈夫ではない。まさか、そんな事態になるとは想像していなかった。一

時は、女としての体だけが自分になってしまい、大丈夫だと言い続ける一個の人間としての自分の居場所が、わたしの中になくなってしまっていた。
　薬、カウンセリング、グループでの話し合い。いろいろなものやことを試したからなのか、時間が経過したからなのか、徐々に大丈夫なわたしが大きくなってきて、今では大丈夫ではないわたしくらいの大きさになってきたような気がする。でも、大丈夫なわたしは、大丈夫でないわたしをどうしていいのかが、まだ分からない。
　週に二回とはいえ、いま、しょうちゃんと一緒にお弁当の配達をしているだけでも、自分にとっては大きな進歩だと思う。薬の量を減らすのにも成功してきている。あとは、気持ちの整理をする必要があると感じている。

＊

「わたし、男と女を分けることに、こだわりすぎていたのではないかって気がするんです」
「ほう」
「ある男性と付き合っているとしますね。その時に、自分は女の代表みたいな気になって、一生懸命に女を演じている。そして、相手の男性には男の代表として男を演じさせようとする。そうじゃなきゃ、恋愛じゃない、セックスじゃないみたいな」
「なるほど」
　カウンセラーは身を乗り出して、わたしの言葉に耳を傾けている。
「わたしはわたしなのに、セックスがからむと、わたしじゃなくて、一人の女だという意識が前面に出て来るんです。で、セックスの間は、自分ではなくて女の代表選手という感じで振る舞ってしまう。そんなことを繰り返してきたように思えるんです」
「ほう」
「わたしのルームメイトが、近いうちに彼氏と一緒に住むことになって、今迷っているところなんです。一人暮らしをするか、それとも実家に戻るか」
「実家ですか」
「事情があって、実家には帰りたくないんです。以前みたいに、こっちでちゃんとお仕事をしながら、生活してみたいんです。近々、就職活動を始めるつもりです」
「そのつもりなのですね」
「車の運転もだいぶ慣れました。それに、最初は女性が多い職場を意識して考えていたんですけど、特にこだわる必要もないかなって気持ちになってきました」
「ほう」
「はい。男とか女なんて関係ないです」
「ほう」
「いまのところは、そんなふうに自分に言い聞かせているだけなんですけど」
「言い聞かせているんですね」
「わたし、わたしになりたいんです。すみません、急に話が飛んで。わたしの言っていること、変ですか？」

「いいえ、変ではないと思いますが、もっと説明していただけませんか」
「出会いを大切にしたいんです」
「出会いですか」
「偶然で成り行き任せの出会いじゃなくて、積極的で意識的な出会いという意味です。これまでのわたしは、男の人の前でわたし自身ではなくて、女として魅力のある女であろうと努めてきました。だから、思ってもいないことを口にしたり、セックスの面で、ある行為をしたくもないのにしなければならないと思い込むとか、そんなことばかりを繰り返していました。それって、出会いじゃないと思うんです。すれ違いです」
「ほう」

「最近、コロニーって言葉を聞いたんです」
「コロニーですか」
「国語辞典と英和辞典を引いてみました。いろんな意味があるんです。いい意味も、悪い意味も。でも、わたしはこの言葉が気に入っています。ある中心点があって、その周りに人が集まっている。そんなふうに、勝手にイメージしています」
「ほう」
「太陽系と似たイメージなんです。水金地火木とか何とか言いますけど、惑星って、それぞれ個性を持っているじゃありませんか、青い星、茶色い星、白い雲に包まれた星――」
「個性ですか」
「そうです。わたし、これからは個性を大切にして生きていこうと思っています。だから、同じように個性を大切にしている人と出会いたいんです。何だか、支離滅裂なことを言っていますよね」
「いいえ、全然。もっと聞かせてください」
　そこで笑ってしまった。
「どうなさいました？」
「すみません。あることを思い出したんです。先生、笑わないで聞いてくださいね」
「ええ、そう努力します」
　カウンセラーが笑みを浮かべた。
「子どもみたいなおじさんっているんです」
「以前にも、そんなこと、おっしゃっていましたね」
「そうでしたか？ 先生にも、お話ししましたっけ？」
「ええ」
「女の人みたいな男の人もいます。でも、何とかみたいな誰々という言い方は変だと思うんです。男、女っていう区別も、意識的にしないように努めています」
「ほう」
「わたしはわたし。誰々は誰々。それでいいと思うんです」

＊

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃい」
　運転席でしょうちゃんを待ちながら、きょう集まった連絡メモを丹念に読んでいく。
「行ってきました」
「お帰りなさい。木下さんは元気そうだった？」
「エッチビデオ見てたよ」
「本当？」
「ほら、こういう感じ」
「まただ。木下さんて、こんな絵ばっかり描くんだから。連絡用の大事なメモなのに」
「ぶっぶー」
「そうね、出発しましょう。きょうは、ちょっと遅れ気味だから急がなきゃ」
　しょうちゃんが助手席側のドアを閉める。車という狭い空間の中で二人きりになる。エンジンを掛ける。やっぱり緊張する。でも、気持ちを変えることができるのは自分しかいない。

　ダッシュボードの時計に目をやる。きょうの午後には、タクシー会社の面接がある。

反・少女

著　　星野廉

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社